『子不語』僵尸説話の加工

中野　清

『子不語』（『新齊諧』・『續新齊諧』）に収録された「僵尸説話」と考えられるものには、以下の二十六則がある。

①『秦中墓道』『子不語』巻二。
②『石門尸怪』『子不語』巻五。
③『畫工畫僵尸』『子不語』巻五。
④『批僵尸頰』『子不語』巻八。
⑤『飛僵』『子不語』巻十二。
⑥『兩僵尸野合』『子不語』巻十二。
⑦『僵尸手執元寶』『子不語』巻十二。
⑧『僵尸求食』『子不語』巻十三。
⑨『僵尸貪財受累』『子不語』巻十三。
⑩『牛僵尸』『子不語』巻十四。
⑪『旱魃』『子不語巻十八』。
⑫『僵尸抱韋駄』『子不語』巻二十二。
⑬『鬼吹頭彎』『子不語』巻二十三。
⑭『僵尸夜肥晝瘦』『子不語』巻二十四。
⑮『焚尸二則』『子不語』巻二十四
⑯『僵尸食人血』『續新齊諧』巻二。
⑰『孤』『續新齊諧』巻三。
⑱『旱魃有三種』『續新齊諧』巻三。
⑲『僵尸拒賊』『續新齊諧』巻四。
⑳『乾屍子』『續新齊諧』巻四。
㉑『尸奔』『續新齊諧』巻五。
㉒『飛僵』（題は同じだが④とは別物）『續新齊諧』巻五。
㉓『僵尸貪財』『續新齊諧』巻六。
㉔『尸變』『續新齊諧』巻八。
㉕『僵尸挾人棗核可治』『續新齊諧』巻八。
㉖『僵尸』『續新齊諧』巻十。

今回検討を加えようとするのは、通番でいえば①から④までと、⑫から⑮までである。

これで、『續新齊諧』を除く『子不語（新齊諧）』の僵尸説話のほぼ全てを検討することとなる。

ただし、『子不語』の中、⑪『旱魃』だけは、『續新齊諧』の「旱魃關係」のものとまとめて、後日を期したいと思う。

今回、検討するものは、一言でいえば、みなあまり作意の見られないものが多い。

本誌前號所載の拙論[1]で、創作意欲の高まった時期のものを取り上げたので、今回は、「加工がされていない例」・「多少の加工が見られる例」がほとんどである。「創作であろう例」は無い。

だがこの「多少の加工が見られる例」の「加工」に、なかなかみごとな物があるのである。

一、加工がされていない例

①『秦中墓道』[2]

秦中は土地極めて厚く、掘ること三五丈にして未だ泉に及ばざる者有り。鳳翔以西は、其の俗、人死するも即ちは葬らず、多くこれを暴露し、其の血肉の化し盡くるを俟ちて、然る後に葬埋す。否なれば則ち凶を發するの說有り。屍未だ消化せずして葬すれば、一たび地氣を得て、三月の後、遍體に毛を生じ、白なる者は白凶と號し、黑なる者は黑凶と號し、便ち人家に入りて孽（わざはひ）を爲す。劉刺史の鄰の孫姓の者、溝を掘りて一石門を得たり。これを開くに、隧道宛然たり。雞犬・疊尊を陳べ設け、皆瓦もてこれを爲す。中に二棺を懸け、旁に男女數人列（なら）び、身を牆に釘うたる。蓋し古の殉ぜ爲（つく）れし者にして、其の仆るるを懼るるが故にこれに釘うちしならん。衣冠と狀貌は、約略睹（ほぼみ）るべきも、稍（やや）や逼りてこれを視んとするに、風穴より起こり、悉く化して灰と爲り、竝びて骨も白塵の如くなれり。其の釘は猶ほ左右の牆上に在り。何れの王の墓なるを知らず。亦た土人の臥形を作す者を掘り得たる有るも、頭角四肢有りて耳目無し。疑ふらくは皆な古屍の化する所なるか。

秦中（陝西省）は土地に大變厚みがあり、三丈（九・六メートル）から五丈（十六メートル）掘っても水脈に達しないこともある。鳳祥府より西の地の習俗では、人が死んでもすぐには土葬せず、多くはそのまま地に曝しておき、白骨化するのを待って、その後で埋葬する。そうしないと凶氣を發するといわれている。死體がまだ腐敗しつくさないうちに埋めてしまえば、いったん地の氣を得ると、三月後に、體じゅうに毛を生じ、白い者は白凶、黑い者は黑凶と呼び、人家に押し入って惡さをする。劉刺史の隣りに孫という姓の者がいるが、溝を掘っていて石の門を掘り當てた。その門を開けてみると

トンネルがそのまま殘っている。素燒きの鷄・犬・罍（水つぼ）・尊（酒つぼ）が竝べてある。中に二つの棺があり、その周りに男女數人が、壁に釘で打ちつけられている。たぶん昔の殉死させられた者で、倒れないように、釘で打ち付けられたものなのだろう。服裝や顔つきはだいたいわかるのだが、近づいてみようとしたところ、穴から風が吹き出てきて、くずれて灰のようになり、骨もくずれて、白いホコリのようになった。しかし釘はまだ壁にそのまま殘っていた。どの時代の王の墓なのかはわからない。土人形の横になったものも掘り出したが、頭蓋骨と手足はあるが耳と目がないものであった。これらはみな古い死體が變化してできたものであろうか。たまたま溝を掘っていて、古墓を見つけ發掘したところ、ミイラ化した死體があったが、風にあたって粉と化した、という話である。「古墓發掘奇譚」くらいのもので、所謂、「凶惡なキョンシー說話」とは言えないものであるが、『子不語』が書き始められて間もない「卷二」に現れるものであり、廣い意味での「僵尸說話」の第一例としておく。

この話は、劉刺史から取材したものである。劉刺史から取材したものには、他に以下のものがある。

同じ『子不語』卷二『馬盼盼』に、

壽州刺史劉介石扶乩（ふけい）を好む。泰州に牧たりし時、仙を西廳に請ふ。

とあり、同じく卷二『劉刺史奇夢』に、

陝西の劉刺史介石、官を江南に補せられ、蘇州の虎丘に寓す。（中略）此の語介石親（みづか）ら余が爲に言ふ。

とある。

また、『子不語』卷十一の『紅衣娘』に、

劉介石太守少（わか）きとき乩仙（けいせん）に事（つか）ふ。自ら言ふ泰州分司に任ずる時（後略）、

とある。

陝西と袁枚の接點というと、まず考えられるのは、乾隆壬申（十七年・1752年）の陝西への赴任だが、赴任してまもなく、父の死によって、喪に服するため南京に歸るので、この時期の知り合いとは考えにくい。

袁枚は、乾隆四十一年に時期は不詳だが蘇州に滯在し(3)、四十三年秋にまた蘇州に滯在しているし(4)、四十四年の一月から(5)、杭州に息子の阿遲を伴って歸り、會稽への旅行をはさんで、五月まで滯在し、多くの奇談を蒐集している(6)。そして一度南京に歸り、その後、またたぶん一人で、蘇州に滯在している(7)。

ちょうどこの時期は、『子不語』の材料を集めていた時期である。『子不語』卷二に、劉介石から取材した『馬盼盼』・『劉刺史奇夢』・『秦中墓道』の三則が集中していることから考えて、劉介石が、江南に補せられて蘇州の虎丘に寓していた頃（それが何時なのかは判然としないが、たぶん乾隆四十一年から四十四

年の閒と見ていいだろう）、蘇州で知り合ったのではないかと思われる。

⑭『僵屍夜肥晝瘦』(8)

　兪蒼石先生云ふ、凡そ僵屍の夜出でて人を攫ふ者は、貌は多く豐腴にして、生くる人と異なる無し。晝其の棺を開けば、則ち枯瘦すること人腊の如し。これを焚くに、啾啾として聲を作す者有り、と。

　兪蒼石先生の話によると、だいたい僵尸の夜に人を襲うものは、顔つきも豊かで、生きている人と變わりはない。だが晝閒に棺を開けてみると、まるで乾し肉のように痩せ細っており、それを火に付すと、キューキューと聲を上げるものもいる、とのことである。

　兪蒼石先生から聞いた話を、そのまま記錄したものである。創作もなにもあるはずもない。兪蒼石は浙江仁和の人、兪葆寅である。蒼石は號であろう。先輩が話してくれたので、記錄だけはしておこう、ということなのだろう。

「人腊」の「腊」は乾し肉。江南人が好む「臘肉」のことであろう。排印本には「人臘」に作るものもある。

⑮『焚尸二則』(9)

　平湖の南門外の某鄉掘りて三穴を出だす。二穴は已に空なるも、中の一穴は棺木依然たり。磚に趙處士の墓と書す。屍は年四十許、貌は生くるが如く、雲履を穿ち、蟹青の綢の袍。綢は一錢の厚みの如くして壞せず。掘る者馬某は、其の屍を覆し出してこれを焚くも、火旺んなる能はざれば、乃ちこれを水に投ず。是の夜鬼大に哭し、一村皆な驚く。事を好む者爲に殘尸を扛げ起こすに、血縷縷として注ぐが如し。乃ち仍りて棺中に納め、土を加へてこれを葬す。是の夕逐に安し。馬姓は今に至るも恙無く、典史の皂役を爲す。

　平湖小西溪の西の蔣姓は田家なり。冬至の前一日、日方に西するに、父の屍を燒かんとす。方に棺を開くに、屍走り出でてこれを追ふ。蔣擊つに鋤を以てするに、屍地に倒るれば、乃ちこれを焚く。晩に歸るに、其の父の罵りて、汝我を燒き甚だ苦し。何ぞ不孝のここに至れる、と曰ふを聞く。其の人の頭は腫れて匏の如く、午に及びて死す。張熙河の目擊する所なり。

　平湖（浙江省平湖市）南門外の某集落で、三つの墓を掘りあてた。二つはすでに空だったが、一つは棺がそのまま殘っていた。レンガに趙處士の墓と書いてある。死體は年齡四十歲ほど、顔は生きているようで、雲の模樣がついた靴をはき、蟹青（水色）の絹の上着をきていた。絹は一錢銅貨ほどの厚みがあり傷んでいない。掘った馬某は棺をひっくり返して、死體を燒こうとしたが、火がうまく熾きないので、なんと死體を水に投げこんだ。この夜、幽鬼が泣き叫び、村中が驚いた。物好きなものが、殘りの死體を引き上げてると、血がド

クドクと流れ出た。そこでまた棺におさめ、土をかけて葬った。この晩は何ごとも起きなかった。馬姓の男は今に至るまで祟りもなく、縣の小役人の使い走りをしている。

平湖の小西溪の西に住む蔣という姓の家は、農家であった。冬至の一日前、日が西に傾く頃、父親の死體を燒こうとして、棺のフタを開けたところ、死體が跳びだして蔣を追った。蔣は鋤で毆りつけ、死體が倒れたので燒いた。夜歸ると、父親が現れて、「お前に燒かれて、ひどく苦しかった。どうしてここまで親不孝ができるのだ」、と罵るのがきこえた。蔣の頭は、瓢簞のように腫れあがり、正午になり死んだ。張熙河が自分で目撃したたことだという。

この二則は張熙河から聞いた話である。

祟るか、祟らないかには、特に一定の法則はない、という話なのだろう。

張熙河は張誠。字は熙河、平湖の人。袁枚の知人。旅行家である。

ここまでの三則は、袁枚にとっては、先輩かあるいは、いくらかは遠慮しなければならない相手が話してくれたことを、そのまま記録したものだろう。

二、多少の加工が見られる例

②『石門屍怪』(10)

浙江石門縣の里書李念先は、租を催さんとして鄉に下り、夜に荒村に入るも、旅店無し。遙に遠處を望むに茅舍に燈有り、光に向ひて行く。稍や近づけば、破れし籬攔れし門を見る。中に呻吟の聲有り。李、里書某糧を催し宿を求む。速に門を開くべし、と大呼するも、竟に應へず。李籬の外從り望むに、地に稻草を遍くし、草中に人有るを見る。枯れ瘠せること灰紙を用て其の面に糊する者の如し。面は長きこと五寸許、闊きこと三寸許、奄奄然として臥して宛轉たり。李病ひ重き人爲るを知り、再三呼べば、始めて低聲に應へて曰く、客自ら門を推せ、と。李其の言の如くして入る。病人告ぐるに疫に染り危に垂とし、家を舉げて死し盡すを以てす。言甚だ慘たり。其に外出し酒を買へと強ひるも、能くせずと辭す。謝錢二百を許せば、乃ち勉め強ひて爬ひ起き、錢を持して行く。壁開の燈は滅し、李倦むこと甚しく、倒れて草中に臥するに、草中に颯然として聲有るを聞く。人の起立する者の如し。李これを疑ひ、火石を取りて火を擊つに、一蓬髮の人を照らし見る。枯れ瘦せること更に甚しく、面も亦た闊きこと三寸許、眼は閉じて血流れ、形は僵屍に同じく、草に倚りて直立す。これに問ふも應へず。李驚きて、乃ち益ます火石を擊つ。火光一亮する毎に、則ち僵屍の面一現す。李遁げ出でんと思ひ、坐して倒退せんとす。一歩を退けば、則ち僵屍一歩を進む。李愈いよ駭き、籬を抉りて奔る。屍こ

れを追ひて、草上を踐み、簌簌として聲有り。狂奔すること里許にして、酒店に闖入し、大に喊びて仆るれば、屍も亦た仆る。酒家灌ぐに薑湯を以てすれば蘇り、具に其の故を道ふ。方めて村を合せ瘟疫あるを知る。人を追ふの屍は、卽ち病者の妻にして、死するも未だ棺殮せず、陽氣に感じて魄を走せしむるならん。村人共に往きて酒を沽ふ者を尋ぬるに、亦た錢を持して橋側に倒る。酒家を離るること尙ほ五十餘歩なり。

浙江石門縣の村役人の李念先が、租稅の催促のために、管轄の集落に出かけた。夜になってから荒れた村に着いたが、宿屋がない。はるかかなたの茅屋に燈りが見えるので、燈りをめざして歩いていった。近づいていくと、垣根は破れ扉が腐った家の中から、呻き聲が聞こえてくる。李は大聲で、「わしは村役人だ。年貢の催促に來たのだ。宿を借りたい。すぐに戸を開けよ」と呼びかけたが返事がない。李が垣根の外から、家の中を覗いてみると、稻藁が家中にしいてあり、藁の中に人がいるのだが、痩せこけて、灰色の紙を糊付けしたような顏色である。顏の長さは五寸ほど、幅は三寸くらいに痩せ、氣息奄々として横たわり、身體を折り曲げている。李は重病人だと氣付いて、再三、呼びかけると、やっとかすかな聲で、「お客さん。自分で戸を開けてください」という。李が自分で戸を開けてはいると、病人は、傳染病に感染し、家中死に絕えてしまったのだ、と悲慘な話をする。李が、外に酒を買いに行ってこい、と强いると、病人は、無理だと斷ったが、錢二百を駄賃にやるというと、無理をして這うように起き、錢を持って出かけた。壁の燈りも消えた。李はひどく疲れていたので、藁の中に倒れ込んだ。すると藁の中からガサッガサッと音がする。人が起きあがろうとしているようだ。李はおかしいと思い、火打ち石を出して打ってみると、ざんばら髪の、ひどく痩せこけて顏の幅が三寸ばかり、閉じた目から血を流した僵尸のようなものが、藁にもたれて立っていた。問いかけても答えはない。李は驚いて、續けて火打ち石を打つと、火花が飛ぶたびに、僵尸の顏が暗闇に浮かびあがる。李は逃げだそうとして、坐ったまま後ずさりをした。一歩分だけ退くと、僵尸は一歩進んでくる。李はいよいよ恐ろしくなって、垣根を破って驅けだした。僵尸は追いかけてくる。草を踏むガサッガサッという、僵尸の足音が聞こえる。狂ったように一里ばかり走ると、酒屋がある。李は飛びこんで、大聲をあげて倒れた。すると僵尸も倒れた。酒屋のものが生姜湯を、口に注ぎ込んでくれたので、正氣にもどり、詳しくわけを話した。そこで分かったのだが、この集落には傳染病が流行していて、追いかけてきたのは、あの病人の妻だという。死んでもまだ棺に入れていなかったので、生きた人の陽氣に感じて、魄が走ったようだ。村人たちが皆で酒を買

『子不語』僵尸說話の加工（中野）

いに出た病人を探したが、錢を持ったまま橋のたもとで倒れていた。酒屋から五十歩あまりの距離だった。

浙江に石門という縣はない。崇德縣石門鎭の誤りであろう。

里書は里正の下役人である。

清朝の保甲制では百戸を一甲とし、十甲を一保として、保長を一人おいた。里正は保長の俗稱である。

戸籍の管理・年貢收納の代行を任されていたので、里書が租稅の督促にでかけるというのは、設定として無理はない。

そして、里書が重病人に酒を買いに行かせるという、御上の横暴ぶりも描きこまれている。

基本的には、「生人の陽氣に感じて、僵尸が生人と同じ行動をする」という話である。生人が倒れれば僵尸も倒れる。

だが、この則の、素晴らしい點は、僵尸と對面する場面の描寫である。

「草中に颯然として聲有るを聞く。人の起立する者の如し。李これを疑ひ、李驚きて、乃ち益ます火石を擊つ。火光一亮する毎に、則ち僵屍の面一現す」、「（火打ち石の）火花が飛ぶたびに僵尸の顔が暗闇に浮かびあがる」という、まるでホラー映畫の一場面のような描寫である。

この部分はなんとも映像的なのである。暗闇の中での、それこそ「石火の光中」に、浮かぶ僵尸の痩せ衰えた顔。

なんとも視覺的・映像的なのである。

そして、

「李遁げ出でんと思ひ、坐して倒退せんとす。一歩を退けば、則ち僵屍一歩を進む。李愈いよ駭き、籬を抉りて奔る。屍これを追ひて、草上を踐み、簌簌（そくそく）として聲有り」。

「李は逃げだそうとして、坐ったまま後ずさりをした。一歩分だけ退くと、僵尸は一歩進んでくる。李はいよいよ恐ろしくなって、垣根を破って驅けだした。僵尸は追いかけてくる。（稻）草を踏むガサッガサッという、僵尸の足音が聞こえる」

ここは聽覺的なのである。音響である。

床（ゆか）に布いてある稻藁を踏む音で、暗闇の中を追い迫る僵尸を描いている。

「映像的な效果」だの「音響的效果」だの、今の我々には、取りたてて新しさもなにもない。

だが、映畫もテレビもない時代だから、映像的なイメージだの音響的イメージを持つことが、どうしてできるようになったのか？

考えられるのは芝居である。

袁枚が戲迷（しばいくるい）だったとする資料は全くない。

一般に、士大夫はたてまえの上では、芝居などは下賤のものの見るものという姿勢をとっていた。

勿論、袁枚はそんなたてまえとは無關係な人間であるし、士大夫もたてまえはたてまえとして、芝居好きも多いし、役者好

きも多いのである。

そして、詩人であり戯曲作家でもある蔣士銓は、袁枚に兄事し、乾隆癸巳（三十八年・1773年）に蔣の『四弦秋』が揚州で、初めて上演された時には、招かれて觀劇に行き、その主演俳優惠郎を見初めたりもしている。(11)

袁枚は、この惠郎以外にも、多くの美少年俳優とも親しく付き合って、スキャンダラスな話題を、乾隆文壇に提供していた。

これだけ條件がそろっていて、だが芝居はあまり見なかったという可能性はないはずだ。

幾人かの、中國人の中國文學研究專家（全て故人であるので名は記さない）が、雜談のおり、『聊齋』より『閱微』より、なんと言っても『子不語』がいちばん怖い、と話してくれたことがある。

現代人にとって『子不語』が、何故いちばん怖いのか、それは視覺的イメージ喚起力が强く、音響的效果にまで氣配りが届いているからではなかろうか。そしてそれは、袁枚が實はかなりな戲迷だあったからなのかもしれない。

③『畫工畫僵屍』(12)

杭州の劉以賢は善く照を寫す。鄰人に一子一父にして室に居る者有り。其の父死し、子外出して棺を買はんとし、鄰人に囑し代りて以賢に其の父の爲に形を傳へんことを請ふ。以賢往きて其の室に入るに、虛として人無し。死者は必ず樓上に居ると思へば、乃ち梯を躡みて樓に登り、死人の牀に就き、坐して筆を抽く。屍忽ち蹶然として起つ。以賢走屍爲るを知り、坐して動かず。屍も亦た動かず、但だ目を閉じて口を張り、翕翕然として眉は撐へ肉は皺よるのみ。以賢念へらく身走れば則ち屍は必ず追はん、竟に畫くに如かず、と。乃ち筆を取りて紙を申べ、屍の樣に依りて描き摹す。臂動き指運ぶ毎に、屍も亦たかくの如くす。以賢大に呼ぶも、人の答應ふる無し。俄にして其の子樓に上り、父に屍の起つを見て、驚きて仆る。又た一鄰の樓に上るに、屍の起つを見て、亦た驚き滾げて樓下に落つ。以賢窘しむこと甚しきも、强ひて忍びてこれを待つ。俄にして棺を抬ぐ者來たる。以賢徐に屍走は苫帚を畏るるを記し、乃ち呼びて曰く、汝等苫帚を持し來たれ、と。棺を抬ぐ者心に走屍の孽有るを知れば、帚を持して樓に上り、これを拂へば倒る。乃ち薑湯を取り灌ぎて仆る者を醒めしめ、而して屍を納めて棺に入る。

杭州の劉以賢は肖像畫に巧みであった。隣に息子一人と父親で、閒借りをしている者がいた。その父親が死んだ。息子は棺を買いに出かけので、以賢に父親の肖像を描いてくれるようにと、隣の人に言い置いて行った。以賢はその部屋に出かけたが、誰もいない。きっと死者は二階だろうと思い、階段を上っていくと、死人の寢臺があった。そばに坐って筆を

取り出すと、死骸がいきなりガバッと起きあがった。以賢は走尸（ツォシー）だと思ったので、坐ったまま動かないようにした。すると死骸も動かない。ただ目を閉じて口を開き、眉根を寄せて、顔に皺をよせているだけである。以賢は、「自分が逃げれば、死骸も絶對に追ってくるから、繪を描いてしまったほうがいい」と思い、紙をのばして筆を執り、死骸の樣子を描きだした。以賢が手を動かし、指を動かすと、死骸も同じように動く。以賢は大聲をあげて助けを呼んだが、答えるものは誰もいない。そこに息子が歸ってきて、二階に上がってきたが、父の死骸が起きあがっているのを見て、驚いて氣絶してしまった。そこにまた隣の人が上がってきたが、やはり死骸が起きあがっているのを見ると、驚いて階段を轉げ落ちてしまった。以賢は窮地に追い込まれてしまったが、なんとか耐えて待ち續けた。すると棺桶屋が棺を運んで來た。走尸が芦の箒（あしぼうき）をきらうことを、以賢はやっと思い出し、「お前たち、盧の箒を持ってこい」と怒鳴った。棺桶屋は慣れているから、走尸ができかかっていると氣付き、箒を持って上がってくると、死骸をひと拂いして倒した。それから生姜湯を持ってきて、倒れた者たちに飲ませて、死骸を納棺したのである。

これも基本的には、「生人の陽氣に感じて、僵尸が生人と同じ行動をする」という話である。

「以賢念（おも）へらく身走れば則ち屍は必ず追はん、竟に晝くに如かず、と」、あるように、劉以賢が終止冷靜に對處し、動かずにいたので、なんとか難にあわずにすむ。

動きがないぶん、パントマイム劇のような面白さがあり、進退谷まった以賢の內心の苛立ち、顔つきなどが容易に想像できる。そして最後に、こういう場面に出くわす確率の高い葬儀屋が、苕帚で魘勝するという釋である。

同じ『子不語』巻五で、『石門尸怪』の次が『空心鬼』、その次がこの『畫工畫僵尸』である。ほぼ同時期に書かれたと考えてもよいであろう。

要するに、袁枚はこの二則で「僵尸」の描き方をほぼ決定した、といえるのではないか。

「苕帚による魘勝（えんしょう）」が、この則で初めて現れることも注目に値する。

④『批僵尸頰』[13]

桐城の錢姓の者儀鳳門外に住む。一夕家に回（かへ）らんとするに、時已に二鼓たり。同事勸むるに明日の早（あさ）に行くを以てするも、錢肯（がへん）ぜず、燈を提げて馬に上り、醉に乘じて行く。掃家灣地方に到るに、荒塚叢密し、樹林內に人有り跳躍して來るを見る。披髮跣足にして、面は粉牆の如し。馬驚きて前まず、燈色漸く綠なり。錢醉に倚りて膽壯なり、手もて其の頰を批（う）つ。其の頭批つに隨（したが）ひ轉ずるに隨（したが）ふも、少頃にして又た回（かへ）る

こと、絲を木偶中に牽くが如く、陰風人を襲ふ。幸に後面に人至れば、其に物退き走げ、仍りて樹林に至りて滅す。次の日、錢の手は黒きこと墨の如し。三四年の後、黒始めて退き盡す。これを土人詢ぬれば、曰く、此れ初めて僵尸と做るも、未だ材料を成さざる者ならん、と。

安徽省桐城縣出身の錢という姓の男は、南京の儀鳳門外に住んでいた。ある晩、家に歸ろうとしたが、時刻はすでに二鼓（午後十時）である。同僚は、朝になってから歸れと勸めたが、錢は承知せず、提燈をさげて馬に乘り、醉ったいきおいででかけた。掃家灣地方まで來ると、荒れた墓が密立している。樹林の中から、飛び跳ねながらやってくる人がいる。ザンバラ髪に裸足で、顔は漆喰の壁のようである。馬は驚いて前に進まないし、提燈の明かりもだんだんと綠色になっていく。錢は醉ばらって大膽になっているので、手でその頰をひっぱたいた。たたけばへこむがまたすぐもとに戻り、まるで絲でつるした操り人形のようであり、腥い風が吹きつけてくる。幸い後ろから人がやって來たので、その怪物は退き逃げ、樹林のところで消えた。次の日、錢の手は墨のように黒くなっていた。三四年たって、やっと黒色は消えた。土地の人に尋ねてみると、僵尸になったばかりで、まだ技が完成していないのだという。

儀鳳門は南京城の北門である。その儀鳳門外に住んでいた、桐城出身の錢という男が、醉って家に歸る途中、掃家灣という土地で僵尸にであい、大膽にもその頰を打つ。

意外な描寫は、「其の頭批つに隨ひ轉ずるに隨ふも、少頃にして又た回ること、絲を木偶中に牽くが如く、陰風人を襲ふ」という部分である。

要するに、ひもで吊した操り人形を叩いたように、手應えが無いということなのだろうが、僵尸の一般的なイメージは、「硬く強張っている」ものであるはずだ。一般的なイメージとはいっても、實は誰も本當のことは知っているわけではない。本物の僵尸は、實は硬く強張ってはいない、という所が妙なリアリティーをもつのではなかろうか。

⑫『僵屍抱韋駄』(14)

宿州の李九なる者は、布を販るを生と爲す。路に霍山を過ぐるも、天晩く店は客に滿ちたり。已むを得ずして佛廟中に宿る。漏兩鼓に下り、睡りは已に熟せるに、夢に韋駄神其の背を撫して曰く、急が起きよ、急ぎ起きよ、大難至らんとす。我が身後に躲せば、以て你を救ふ可し、と。李驚き醒め、踉蹌として起つに、牀後の厝棺に耆然として聲有り、走り出でたる一屍を見る。遍身は白毛にして、反って銀鼠の套を穿つ者の如く、面上も皆な滿ちて、兩眼は深黒にして、中に綠眼有りて、光ること閃閃然として、直ちに來たりて李を撲

『子不語』僵尸說話の加工（中野）

つ。李奔りて佛櫃に上り、韋駄神の背後に躲す。僵屍兩臂を伸し韋駄神を抱きて口にこれを咬み、嗒嗒として聲有り。李大に呼べば、群僧皆な起き、棍を持し火を點じ把り來る。僵屍逃げて棺中に入るに、棺合さること故の如し。次の日、韋駄神の僵屍に損壞せらるるをみるに、持する所の杵は折れて三段と爲り、方めて僵屍の力の猛なること此の如きを知る。群僧官に報じて、其の棺を焚く。李韋駄の恩に感じ、塑像の爲に金を妝す。

宿州の李九は、布を賣って生活をしていた。道中霍山を過ぎて、日が暮れたが旅館は客でいっぱいである。やむを得ず佛廟に宿をとった。夜の兩鼓（二鼓。午後十時）を過ぎ、熟睡していたのだが、夢に韋駄神が現れて彼の背を撫でて、「急いで起きろ、急いで起きろ、大災難がやってくる。私の後に隱れていれば、お前を助けることができる」と言う。李は驚いて目覺め、よろよろと起き上がると、ベッドの後に置いてあった棺で、ガバッという音がして、死體が跳びだしてきた。體中に白い毛がはえ、いいずなの上着を、裏返して着ているようである。顏にも毛が滿ちていて、兩眼は深い黑の中に、綠色の瞳がありピカピカと光り、まっすぐ李に歐りかかってきた。李は厨子に跳びこんで、韋駄神の背後にかくれた。僵尸は兩腕で韋駄神を抱えこみ、ガリガリと音をたててかじっている。李は大聲で叫んだ。僧たちがみな起き出て棍棒を持って、燈りをつけてやってくる。僵尸は棺の中に逃げこんだが、棺の蓋はもとのとおりぴったりとしまった。夜が明けてから僵尸にこわされた韋駄神を見ると、持っていた楯は三つに分かれ、あらためて僵尸の力が、こんなにも強いということを知った。僧たちは役所に知らせて、この棺を燒いた。李は韋駄神の恩に報いるため、韋駄神の塑像に金の塗裝をほどこしたのである。

宿州は、現在の安徽省宿州市。霍山は、ここでは山ではなく、安徽省六安市の南にある、霍山縣のことであろう。

韋駄神は所謂、韋駄天である。佛法の守護神として、中國の禪寺では本堂の前に祀られることが多い。道教の韋將軍（梁の將軍韋放。北魏との戰いに功あった）信仰と習合し、武將の姿をしている。

だから「杵」は「きね」ではなく、武具の「杵」で、楯のようなものである。

表現が面白いのは、「遍身は白毛にして、反って銀鼠の套を穿つ者の如く、面上も皆な滿ちて、兩眼は深黑にして、中に綠眼有りて、光ること閃閃然として、直ちに來たりて李を撲つ」という部分である。

ここでいう「銀鼠」は吉林省山中に產するイタチ科最小の獸。高級な毛皮が取れる。假にほぼ同種の和名「いいずな」と譯しておく。

「反」は、「裏返し」ということ。
保温のために毛皮のものを着るのなら、毛は内側になる。「裏返せば」毛が外になる。
だから「體中に白い毛がはえ」、その様はというと、「いいずなの上着を、裏返して着ているようである」というのである。

⑬『鬼吹頭彎』(15)

林千總なる者は、江西の武舉なり。餉を解りて都に入らんとし、路に山東を過ぎ、古廟の中に宿るに、僧言ふ、此の樓に怪有り、宜しく小心すべし、と。林勇を恃み、夜燈燭を張り、坐して以てこれを待つ。半夜の後槖槖として聲有り、一紅衣の女梯を踏みて上り、先づ佛前に向かいて膜拜し、禮を行い畢り、林を望みて笑ふ。林意と爲さざれば、女髮を被り目を瞋らせ、前に向ひて林を撲つ。林几を取りてこれを擲うてば、女身を側めて几を避け、而して手を以て來り牽かんとす。林其の手を握るに、冷く硬きこと鐵の如し。女握られて動く能はず。乃ち口を以て林を吹くに、臭氣耐え難し。林已むを得ず頭を回らせてこれを避く。格鬥すること良や久しくして、雞鳴の時に至れば、女の身地に倒る。乃ち僵屍なり。明くる日官に報せてこれを焚く。此の怪逐に絕へたり。然れども林は此れ從り頭頸は彎むこと茄瓢の如く、復た正す能はざりき。

林千總は、江西の武舉人である。租稅を都に押送する途中、山東を過ぎたあたりで、古い廟に宿をとった。僧が言うには、「この樓には怪しいものがおります。お氣をつけなさいまし」とのこと。林は自分の武勇に誇りを持っていたので、夜中まで燈りをつけ、出た來るのを待った。眞夜中をすこし過ぎると、コトコトと音がして、紅い着物をきた女がハシゴを登ってくる。まず佛前に額づき、禮を終わってから、林に笑いかけた。林が相手にしないでいると、女は髮を振り亂し、目を怒らせて、まっすぐ林に歐りかかってきた。林は小机を取り投げつけた。女は身をそらせてかわし、つかみかかってきた。林がその手をつかむと、硬く冷たく鐵のようである。女は手をつかまれ動くことができないので、息を吹きかけてきた。耐えられない臭さである。林はやむを得ず、顏をそむけて息を避けた。しばらく取っ組み合っていたが、一番鷄の啼く時間になると、女は倒れた。僵尸である。夜が明けてから役所に知らせ、この僵尸を燒いた。その後怪しいことは絕えて怒らなかったが、しかし林は頭から首までがナスのように曲がり、なおすことは逐にできなかったのである。
林千總の「千總」は、綠營の武官で六品官。下級將校であるが、武舉人ではこのへんまでが限界という地位。
その林千總が、解餉すなはち租稅を都に押送する、という任務の途中、古廟で僵尸と戰い、息を吹きかけられて、頭頸部が

まがった、という話である。

文飾の見られるのは、せいぜい、「林其の手を握るに、冷く硬きこと鐵の如し。女握られて動く能はず、乃ち口を以て林を吹くに、臭氣耐へ難し」くらいのものである。

だが見方によっては、說話（あるいはホラ話）というものが誕生する、一つの典型的な狀況だ、とみることもできるのである。

任務中に、說明できないような（不都合な）理由で、怪我をし、後遺障害が殘ったとしたら、どういう言い釋け（あるいはホラを）を考え出すかという問題である。

二百年以上前の、幽鬼などの存在を誰もが信じていた時代である。

林千總がこういう武勇傳をでっちあげて、自分の失敗を取り繕った、と見ることもできるのではなかろうか。

武擧人の武勇傳ではあるが、「頭頸部がまがっている人の武勇傳」である可能性もある、といいたいのである。

病氣や怪我の後遺症などで、障碍の殘ったものが、障碍について質問されたときに、はぐらかすためにこういう小話が用意され、あるいは口承されてきたのではなかろうか。

これなら障碍が體のどの部分にあっても、どのようにでも應用できる。

鬼・僵尸あるいは妖怪などと戰い、息を吹きかけられあるいは毆られ・蹴られした、そのため今でもこの障碍がある、という說話の誕生である。

「出來の良い說話をほぼ聞いたまま記したであろう例」（⑤『飛僵』『子不語』卷十二）にかなり近いものと見てよいだろう。

以上、「多少の加工が見られる例」の「多少の加工」は、創作へと進む爲の、描寫の研鑽過程と考えられるのである

【注】

（1）『子不語僵尸 說話の創作性』（『中國詩文論叢』第二十九集、二〇一〇年）。

（2）原文は以下のとおり。

秦中土地極厚、有掘三五丈而未及泉者。鳳翔以西、其俗、人死不卽葬。多暴露之、俟其血肉化盡、然後葬埋。否則有發凶之說。屍未消化而葬者、一得地氣、三月之後、遍體生毛、白者號白凶、黑者號黑凶、便入人家爲孽。劉刺史之鄰孫姓者、掘溝得一石門、開之、隧道宛然。陳設雞犬・罍尊、皆瓦爲之。中懸二棺、旁列男女數人、釘身於牆。蓋古之爲殉者、懼其仆故釘之也。衣冠狀貌、約略可睹、稍逼視之、風起於穴、悉化爲灰、竝骨如白塵矣。其釘猶在左右牆上。不知何王之墓。亦有掘得土人作臥形者、有頭角四肢而無耳目。疑皆古屍之所化也。『秦中墓道』、『子不語』卷二。

（3）『過蘇州有懷南溪太守新遷觀察轉漕北行』、『小倉山房詩集』

卷二十五。

（4）戊戌九月余寓吳中。『隨園詩話』卷五。

（5）『正月二十二日出門作』、『小倉山房詩集』卷二十六。

（6）載得杭州鬼一車。『余續夷堅志未成、到杭州得逸事百餘條、賦詩志喜』、『小倉山房詩集』卷二十。

（7）『蘇州徐西圃居士招（後略）』『小倉山房詩集』卷二十。

（8）原文は以下のとおり。

俞蒼石先生云、凡僵屍夜出攫人者、貌多豐腴、與生人無異。晝開其棺、則枯瘦如人腊矣。焚之有啾啾作聲者。

『僵屍夜肥晝瘦』、『子不語』卷二十四。

（9）原文は以下のとおり。

平湖南門外某鄉掘出三穴、二穴已空、中一穴棺木依然、磚書趙處士之墓。屍年四十許、貌如生、穿雲履、蟹青紬袍、紬如一錢厚不壞。掘者馬某覆出其屍而焚之、火不能旺、乃投諸水。是夜鬼大哭、一村皆驚。好事者爲扛起殘屍、血縷縷如注、乃仍納棺中、加土葬之、是夕逐安。馬姓至今無恙、爲典史皂役。

平湖小西溪之西蔣姓田家也。冬至前一日、日方西、燒父屍。方開棺、屍走出追之、蔣擊以鋤屍倒地。乃焚之。晚歸聞其父罵曰、汝燒我甚苦。何不孝至此。其人頭腫如匏、及午而死。張熙河所目擊也。『焚尸二則』、『子不語』卷二十四。

（10）原文は以下のとおり。

浙江石門縣里書李念先、催租下鄉、夜入荒村、無旅店。遙望遠處茅舍有燈、向光而行。稍近見破籬攔門、中有呻吟聲。李大呼、里書某催糧求宿、可速開門。竟不應。李從籬外望、見遍地稻草、草中有人、枯瘠如用灰紙糊其面者。面長五寸許、闊三寸許、奄奄然臥而宛轉。李知爲病重人、再三呼、始低聲應曰、客自推門。李如其言入。病人告以染疫垂危、舉家死盡。言甚慘。强其外出買酒、辭不能。許謝錢二百、乃勉强爬起、持錢而行。壁閒燈滅、李倦甚、倒臥草中、聞草中颯然有聲、如人起立者。李疑之、取火石擊火、照見一蓬髮人、枯瘦更甚、面亦闊三寸許、眼閉血流、形同僵屍、倚草直立。問之不應。李驚、乃益擊火石。每火光一亮、則僵屍之面一現。李思遁出、坐而倒退。退一步，則僵屍進一步。李愈駭、抉籬而奔。屍追之、踐草上簌簌有聲。狂奔里許、闖入酒店、大喊而仆。屍亦仆。酒家灌以薑湯蘇、具道其故。方知合村瘟疫、追人之屍、卽病者之妻、死未棺殮、感陽氣而走魄也。村人共往尋沽酒者、亦持錢倒於橋側。離酒家尚五十餘步。

『石門屍怪』、『子不語』卷五。

（11）『揚州秋聲館卽事寄江鶴亭方伯兼簡汪獻西』八首、『小倉山房詩集』卷二十三。

（12）原文は以下のとおり。

杭州劉以賢、善寫照。鄰人有一子一父而居室者。其父死、子外出買棺、囑鄰人代請以賢爲其父傳形。以賢往、入其室、虛無人焉。意死者必居樓上、乃躡梯登樓、就死人之牀、坐而抽筆。屍忽蹶然起、以賢知爲走屍、坐而不動。屍亦不動、

但閉目張口、翕翕然眉撐肉皺而已。以賢念身走則屍必追、不如　竟晝、乃取筆申紙、依屍樣描摹。每臂動指運、屍亦如之。以賢大呼、無人答應。俄而其子上樓、見父屍起驚而仆。又一鄰上樓、見屍起、亦驚滾落樓下。以賢窘甚、強忍待之。俄而抬棺者來。以賢徐記屍走畏苕帚、乃呼曰、汝等持苕帚來。抬棺者心知有走屍之孽、持帚上樓拂之倒。乃取薑湯灌醒仆者、而納屍入棺。『晝工晝僵屍』、『子不語』卷五。

(13)　原文は以下のとおり。

桐城錢姓者、住儀鳳門外。一夕回家、時已二鼓、同事勸以明日早行。錢不肯。提燈上馬、乘醉而行。到掃家灣地方、荒塚叢密、見樹林內有人跳躍而來。披髮跣足、面如粉牆。馬驚不前、燈色漸綠。錢倚醉膽壯、手批其頰。其頭隨披隨轉、少頃又回、如牽絲於木偶中、陰風襲人。幸後面人至、其物退走、仍至樹林而滅。次日錢手黑如墨。三四年後黑始退盡。詢之土人、曰、此初做僵屍、未成材料者也。

『批僵屍頰』、『子不語』卷八。

(14)　原文は以下のとおり。

宿州李九者、販布爲生。路過霍山、天晚店客滿矣。不得已宿佛廟中。漏下兩鼓、睡已熟、夢韋馱神撫其背曰、急起、急起、大難至矣。躲我身後、可以救你。李驚醒、踉蹌而起。見牀後厝棺砉然有聲、走出一屍。遍身白毛、如反穿銀鼠套者、面上皆滿、兩眼深黑、中有綠眼、光閃閃然、直來撲李。李奔上佛櫃、躲韋馱神背後。僵屍伸兩臂抱韋馱神而口咬之、嗒嗒有聲。李大呼、群僧皆起、持棍點火把來。僵屍逃入棺中、棺合如故。次日見韋馱神被僵屍損壞、所持杵折爲三段、方知僵屍力猛如此。群僧報官、焚其棺。李感韋馱之恩、爲塑像妝金焉。

『僵屍抱韋馱』、『子不語』卷二十二。

(15)　原文は以下のとおり。

林千總者、江西武舉。解餉入都、路過山東、宿古廟中。僧言、此樓有怪、宜小心。林恃勇、夜張燈燭、坐以待之。半夜後橐橐有聲、一紅衣女踏梯上、先向佛前膜拜、行禮畢、望林而笑。林不爲意、女被髮瞋目、向前撲林。林取几擲之、女側身避几、而以手來牽。林握其手、冷硬如鐵。女被握不能動。乃以口吹林、臭氣難耐。林不得已、回頭避之。格鬥良久、至雞鳴時、女身倒地、乃僵屍也。明日報官焚之。此怪遂絕。然林自此頭頸彎如茄瓢、不復能正矣。

『鬼吹頭彎』、『子不語』卷二十三。